

---

# 僕たちは、何処で傷ついたのか

両角忘夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕たちは、何処で傷ついたのか

### 【Nコード】

N2009A

### 【作者名】

両角忘夜

### 【あらすじ】

精神障害者の彼女との同棲生活。誕生日には神様になれると信じる彼女と、妄想を怒鳴り付ける僕。精神医療は助けしてくれない。

## 第一話 神様になりたい

今度の五月十日は、彼女の二十六回目の誕生日。その日に彼女は神様に生まれ変わり、なぜか銀行口座に三百万円が振り込まれるらしい。

これまでの妄想に比べたら、ずいぶんハッピーで無害なものだ。どうせ神様なんかねない。誕生日を過ぎ、落胆するであろう彼女を僕は抱きしめ、慰めるつもりだ。

しかし、そんなに神様なかなりたいか。

「そりゃ、なりたいよ」と彼女は言う

「どうして」

「だって、みんな超能力あるのに、あたしだけ普通なんだもん」

……超能力？

「ひょっとして、僕もエスパーだと思ってる？」

「もちろんパパもよ」

彼女は、一つしか歳の違わない僕をパパと呼ぶ。

「だってパパは、ポルターガイストを追い払ってくれたじゃない」  
「そういえば、そんなこともあった。」

半年前、精神病院から退院してきた彼女の部屋にはまだたくさん  
の悪霊がいて（彼女の説明によると）、壁を鳴らすなどの悪さをしていた。

「……助けてッ」

久しぶりに受話器から聞いた彼女の声はひどく怯えていたから、  
家が近い僕は自転車で飛んでいき、その晩から同棲が始まった。

正直、ポルターガイストなんて、霊を信じない僕にはわからない  
訴えだった。確かに壁がパシッとかミシミシなんて鳴ることもあ  
ったが、木造アパートでエアコンをかけていれば、内外の気温差で  
壁が伸縮し、音も出るかもしれない僕は科学的に解釈した。

だが、ポルターガイストは彼女にとっては現実だ。独学で心理学

や精神医学を学んだ僕としては、この場合、「客観的事実」より「心理的事実」の方が重要に思えた。だから大声で、壁に向かって怒鳴りつけた。

「るっせえんだよ、てめえら！」

それから彼女に説明した。

「心配することない。どうせ奴らは、くだらない下等靈さ。僕の方が強いんだ。もし奴らの方が強いなら、ちゃんと僕の前にも出て物言えるはずだよ。もちろん、ぶん殴ってやるけどね」

そう言うと、彼女は僕にしがみついてきた。

「駄目。モジャ（幻聴の名前）がパパを殺すって言ってる」

僕は笑って、「殺されるわけないよ」

「でもモジャが、パパの正体を知ってるって言ってるよ」

「正体？」

「秘密結社の人間だから気をつけろって」

意外なことを言われ、言葉に詰まった。でも、沈黙を長引かせちゃいけない。彼女を不安がらせぬよう、自分の優位を誇示し続ける必要があった。

「そんなデタラメを言うのは、実力じゃ僕に勝てないからさ。秘密結社だか知らないが、文句があるなら、直接僕の前に出てきて言えばいいんだ」

「あれ……、聞こえなくなった」

「ほらみる」

こんなふうには僕は何度も彼女の幻聴と対決し、連勝した。しばらくするとポルターガイストも消え、平穏な日々が続いた。しかし最近になって再び現れた幻聴が、彼女に「誕生日には神様になれる」なんて告げてきたのだ。

「だからパパだって超能力者なんだよ」

「そうかな」

「でも、あたしはサトラレだもん。このままだと弱いから超能力が欲しい」

『サトラレ』というのは、映画やテレビドラマにもなった人気漫画である。物語には少数のサトラレと、多数のサトリが登場し、サトラレはサトリに心を読まれてしまうという設定だ。

この作品が、注釈妄想に怯える統合失調症などの精神障害者に、共感と動揺をもたらした。「私もサトラレだ！」と思う人が続出したのだ。

「けど、隠し財産があるとか、過去に人を殺しちゃったとか、それなら心読まれたくないけど、やましいことなければ平気じゃない？」

「心読まれるだけじゃない。操られちゃう」

「じゃあさ、僕のこと好きって気持ちも、操られた感情？」

「あたしの本当の気持ちだよ」

「隠しておかなくちゃいけないこと？」

「そんなことない」

よしよし。僕は彼女を抱き寄せてキスをし、頭をナデナデした。

安心してほしい。君の病気は僕が治す。悪くなるばかりの病態に驚き、うろたえて何もできなかった以前の僕とは違うから。

「地面から糸で引つ張られる」と言って倒れたり、テレビタレントに名前を呼ばれたと怖がったり、薬の副作用でいつも首や手が震えていた彼女。

彼女が入院する一週間前の夜、外食の帰りに近くの公園で花火をした。蒸した風がふき、体がべとついて気持ち悪い。

線香花火もなくなって、公園を出た。歩きながらギャグを言うと、彼女は笑いながらついてきたが、煙草屋の自販機の前でふいに立ち止まった。

振り向くと虚ろな表情をしている。唇が微かに動き、小さな声で「別れたい」と言われた。

「……どうして」

驚いて理由を問うと、「怖いから」と彼女は言う。

「大丈夫。僕が君を守るから」  
そう言ったのに、彼女は路上にへたりこんでしまった。

「パパが怖い」

「えっ」。僕は絶句した。

「パパが怖い……。パパが怖い。助けて。パパが怖い。パパが」

「どうして」

「ストーカーだから」

「はあ。なに言ってるんだよ」

「……だったらなんで、あたしのこと好きって嘘つくの？」

「好きだから好きなんだよ」

「怖い」

子供のように泣き出す。妄想だけじゃない。彼女は僕まで怖がっていた。

途中まで見送ってから別れた。数日して心配になり、電話をかけたが通じない。一週間後に自転車に乗って彼女の部屋まで行くと、鍵が閉まっていた。

その日の同時刻、半裸の彼女が街を徘徊し、警察に保護されたことは、本人に後から教えてもらった。

彼女が消え、残された僕は、仕事の合間に図書館やネットカフェに通い、心理学や精神医学を勉強した。DSM。精神分析。障害者福祉。脳生理学。クレペリン。フロイト……。特に、ユング心理学や家族療法には興味を持った。

彼女とまた会いたかったから。そのときにはちゃんと助けられる自分になりたい、と頑張って頑張った。

## 第二話 精神医療を信じない

「神様になれたら何したいの?」。僕は訊ねた。

「何もしない」

「えっ、何もしないの」

「うん。何もせず、ただ静かにパパと暮らす」

「ふーん。それも良さそうだな」

彼女が神様になったら、僕だってもう働かなくてもいいだろう。

何もせず、神様であることを隠して、こっそり生きていくのも悪くない。

「でも僕が神様になれたら、世界を平和にしてみたいな」

彼女が言うように、たとえ僕が超能力者でも、世界を平和にできるほどの力はない。アメリカの大統領や、スーダンや北朝鮮の独裁者を超能力で暗殺するくらいでは、新しい戦争が再生産されるだけだ。

「神様くらい的人物が世界を治めないと、平和にならないと思う」

「そんな難しいこと、パパはしなくていいよ」と彼女は言う。

それから、こうも言った。

「神様になれたら、ママや弟にも会いたい」

翌日は通院日だった。僕も仕事を休み、彼女に同行する。待ち合  
いロビーで一時間待ち、やっと呼ばれて診察室に入る。

「具合はどうですか」。医師が彼女に質問する。

「……あの、まだ頭のなかで声に話し掛けられるんです」

「夜は眠れますか」

「はい」

「食欲はどうですか」

「ときどき、吐き気がして食べられなくなります」

「じゃ、お薬を少し変えておきましょう。はい、いいですよ」

「ありがとうございます」

約五分間の診察。

僕は既存の精神医療をあまり信頼していない。五カ月間入院して治療を受けたはずの彼女は、ポルターガイストなど妄想がひどくなっていたし、通院してもスピード診察で、これじゃただの薬屋だ。

診察する医師のなかには威圧的な人物もいて、彼女が入院中にバケツ一杯分の血を抜き取られたと訴えたら、即座に「そんなこと、ありえませんか」と否定した。

医師は患者の妄想に振り回されてはいけない、という原則があるのかもしれないが、人の精神に携わる者なら、もう少し相手の「心理的事実」を尊重してもいいだろう。

おかげで彼女は病院を怖がり、何度も通院先を変えてきた。

ただし、どの病院もスピード診察であることは変わらず、治療は薬だけで済まされた。生物学的精神医学が主流だからだろうが、薬を出すだけ、悪化したら入院させるだけでは対症療法にしかない。

脳や遺伝子が原因なら、生物学的治療も大切だろう。でも僕は、「精神病は対人関係の病」と言われた方がしっくりする。

精神病は医者だけが治すものではない。医療が無用とは言わないが、家族や友人、恋人が支えて治す病気だと思う。

五月九日になった。普段はベゲタミンとハルシオンで昼まで寝ている彼女も、今朝は早起きして出勤する僕を見送った。僕もつられて、そわそわした気分だ。

明日には神様になれる、三百万円が振り込まれる、と彼女は信じている。僕は、そんなことありえない、と思いつつ、ひよっとしたら……なんて考えたりもした。

それは楽しい空想だった。

子供の頃、ドラえもんと同居するのび太になりたい、と夢想したことがある。

ドラえもんは、いろんな夢の道具を出してくれる。けどのび太は、それを活かさきれない。自分だったらもつと上手く使いこなし、幸せになれると思った。

彼女をドラえもんに例えるのもどうかと思うが、恋人がドラえもん以上の神様に進化するなんて素敵な話だと思う。

気が向いたら、新興宗教でも始めようか。彼女が教祖で、僕が教団経営を担当する。

仕事帰りに駅前彼女と待ち合わせた。めでたい気分なので、焼肉屋に行くことにした。骨つきカルビ、塩タン、ミノ、ビール。美味しく食べた。

レンタルビデオ屋で、『ザ・仏陀』なんてビデオを借りて帰る。

僕がギャグを言い、彼女が笑いながら歩いた。ところが煙草屋の自販機の前まで来ると、急に彼女はトーンダウンして大人しくなった。小さな声で、「あたし、ほんとに神様になれるかな」なんて言う。「どう、だろうね」

マイルドセブンを買う彼女。不安なのだろう。

「まさか……神様になるって、死んじゃうことじゃないよね」

「そんなことないよ。でも、煙草は減らした方がいいな」

「死ぬなんてイヤッ。パパと会えなくなる」

「死んだら、化けて出てこいよ」

「パパ!」。しがみついてくる。「でも、でも……」

「でも、なんだよ」

「でも、お化けより神様になりたい」

ははは。吹き出してしまった。

帰宅して『ザ・仏陀』を見た。画像はサイケだが、哲学的で真面目な映画だった。けれどゴータマシッダルタの生涯なんて退屈だったみたいで、彼女は途中でイビキをかきはじめた。

仏教的に悟ると、人は無の境地に至り、苦の輪廻を脱するという。

神様になりたいなんて言うのは強欲に聞こえる。仏陀は、執着を捨てよ、と教えた。強欲な望みと悟りは無縁のものだろう。でも彼女は、神様になっても「何もしない」。僕と静かに暮らしたいだけだという。

神様にでもならなければ静かに暮らせないと、彼女は思っている。

### 第三話 楽しく生きよう

けつきよく誕生日には何も起こらなかった。夕方、二人で銀行にも確認に行ったが、三百万円の入金はなかった。

「そりゃ、そうだよな」。僕は苦笑いした。

「そりゃ、そうよね」。彼女も寂しそうに言う。

「あのさ、こうなったらタイ料理でも食べにいかない?」

「あたし、食欲ないよ」

「いや、駄目さ。こんな日は、辛くて美味しい料理をいっぱい食べないと」

「焼肉が、まだ胃のなかで消化不良起こしてるよ」

「もうウンコになって流れたよ」

「パパ、汚いんだから」

二人で笑った。

シンハービールで乾杯し、誕生日を祝った。楽しい気分ですべて部屋に帰り、音楽を聴きながら寝転んでいると彼女が言った。

「モジャが、今度は悪魔にするって言うてきた」

「うるせえ幻聴だなあ。神様になるっていうのも嘘だったから、信用できないよ」

「今度は本当だって言うてる」

「信じてほしけりゃ、姿も現せて……」

彼女が広告紙の裏に絵を描き始めた。ニコちゃんマークに細い手足、貧相な毛が数本生えている。

「モジャだよ」

「えっ、これがモジャなの?」

幻聴の正体にしては、なんとも間抜けなキャラクターである。

「しかし、まんまと引つ掛かったなあ」

「引つ掛かった……って?」

「これでモジャを捕まえることができたんだ。もし今度悪さをした

ら、紙ごと破いてやる」

「パパ、すごい」

「まずは、これまでのことを謝らせよう」

僕は彼女に見せながら広告紙を破る真似をした。

「モジャが、ごめんなさいって言ってる」

「やっと反省したか。じゃ、ご褒美をあげよう」

ピンクの蛍光ペンで、足元に花を描いた。

「喜んでるよ」。彼女も楽しそうに笑った。

僕は画鋏で、壁にモジャの絵を貼り付けた。

モジャを捕まえてからも、彼女の病態が劇的に改善したわけではない。ひどい妄想は影を潜めたが、僕が仕事でいなくなる昼間の脱力感が大きく、リタリンを処方されている。

たまに彼女は、壁に貼られたモジャと話したりする。色ペンで花を増やしてあげたから、もう悪いことは言わないらしいが。

かわいいモジャの絵を見ていると、過去の痛みなんて忘れてしまいきそう。僕たちは何処で傷ついたのだろうか。

統合失調症の原因は、脳内伝達物質であるドーパミンの分泌異常と最近では言われる。それ以前は、親の態度や気持ちに一貫性がなく、接し方がダブルバインドだったりすると、子供が統合失調症になりやすいと言われた。

親のダブルバインドとは、矛盾した二重のメッセージで子供を拘束することである。

たとえば、優しく手を広げ、子供を抱き寄せる母親の冷たい表情。子供は母親が、本当は自分を好きではないと気付いてしまう。すると、子供はどうしたら良いかわからない。抱かれたままでも嫌がられるし、手を振り払って拒んでも嫌われてしまうから。

彼女の家庭はどんなふうだったろう。実家は電車で三十分離れた町にある。僕はまだ、彼女の家族に会ったことがない。彼女も、四

年前に家を出て以来会っていないそうだ。

一年半前、僕たちは携帯電話の出会いサイトで知り合った。共通の話題はパンク系の音楽で、メールだけで話していた頃は彼女が精神障害者とは知らなかった。

彼女も僕の家庭を知らない。だから、僕を信じてもらうには時間がかかった。自分の病気を知っても去らない僕を不審に思い、ストーカーではないかと疑ったのもそのせいだろう。

彼女から僕が去らなかつた理由、彼女を大切に思い、二人で幸せになりたいと願った気持ちは、僕の過去の悲しい物語を話せばわかってもらえると思う。

でも、今はそんな辛気臭い話はいらない。傷付けあわない家族なんていないし、今の僕は幸せなのだから、僕がたくさんの人から許されてきたように、全部許して、忘れてしまおう。

大切なのは今だ。楽しく生きていこうと思う。

六月、二人で新宿のライブハウスに、グラインドコアとノイズ系のバンドが出演するマニアックなイベントを見に行った。

僕のお目当てのバンドは、エアプールジャンクス&プライマリー。エフェクターを多用して不思議な音を奏でるギターと、催眠的なリズムを刻むパーカッション。二人組のノイズユニットで、演奏しながらそれぞれに詩を朗読する。

グラインドコアでは、名古屋から来たアンホリーというバンドのパフォーマンスが最高だった。ステージ前は、最初の曲からモツシユとダイブの嵐。危ないので僕たちは参加せず、後ろに下がってそれを見ていた。

曲にノッて、パンクス同士がもつれあう。破れたシャツ。怒号。血と汗。安全靴で蹴飛ばしあう。

「汚くてサイコー！」

曲の合間に誰かが叫んだ。

ライブハウスを出ると、湿っぽい風がふいていた。タクシーが客を捜し、酔っ払いが電柱に絡んでいる。

「ねえ、あたしたちもバンドやらない？」。彼女が言った。

「いいかもね」

「すごい前衛的な、かつこいいバンドがやりたいの」

終電にはまだ間がある。喫茶店に入って休憩することにした。ドリンクを飲みながら、彼女はバンドのアイデアを語る。テンションが上がり、躁になった。

ウェイターが申し訳なさそうに近づいてきて、「すみませんが、他のお客様もいらっしやいますので、もう少し小さな声にしていただけませんか」と言った。

注意され、一瞬静かになった彼女は、しかしまた大声で喋り出したので、腕をつかみ、外に出た。

電車に乗っても彼女は元気過ぎたから、キスをして黙らせた。帰ったら、もつとたくさんキスをしよう。

公共の場で大声を出してはいけません。……なんて、電車のなかのキスも、迷惑かもしれないが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2009a/>

---

僕たちは、何処で傷ついたのか

2010年10月8日15時47分発行